

オーストラリア・アボリジニ女性の労働と経済生活

—— 社会変化の視点から ——

窪田 幸子

1. はじめに

オーストラリア北部特別地域 (Northern Territory) にあるアーネムランド (Arnhem Land) は、オーストラリアの先住民、アボリジニの土地として彼らの権利が守られている約10万平方キロメートルの広大な地域である (地図)。このアーネムランドの北東部に、ヨロンゴ (Yolongu) と自称するアボリジニの人々が暮らしている。この地域には、1940年前後にキリスト教伝導団によって町が相次いで建設された。それまでのヨロンゴは昔ながらの遊動的な狩猟採集の生活をおくっていたが、徐々に遊動の生活から定住の生活に移り、町や小規模の村に暮らすようになった。現在の彼らの生活は、狩猟採集による生業経済から貨幣経済へと移行し、加速度的に白人の物質にあふれる生活になってきている。こうした中で、ヨロンゴの生活にはさまざまな場面での変化や適応がみられる。居住集団の構成や集団同士の関係、特にそのなかでの女性の立場、生業・貨幣混合経済に移行してきたかれらの生活、工芸品製作のもつ新たな経済的、社会的意味などについてはこれまでに発表してきた [Kuboto 1991, 1992, 窪田 1992]。本文では生業・貨幣混合経済のなかにあるアボリジニ社会にみられる男女の経済への適応の違いを整理して示し、近年新しい現象として注目される変化について述べたい。

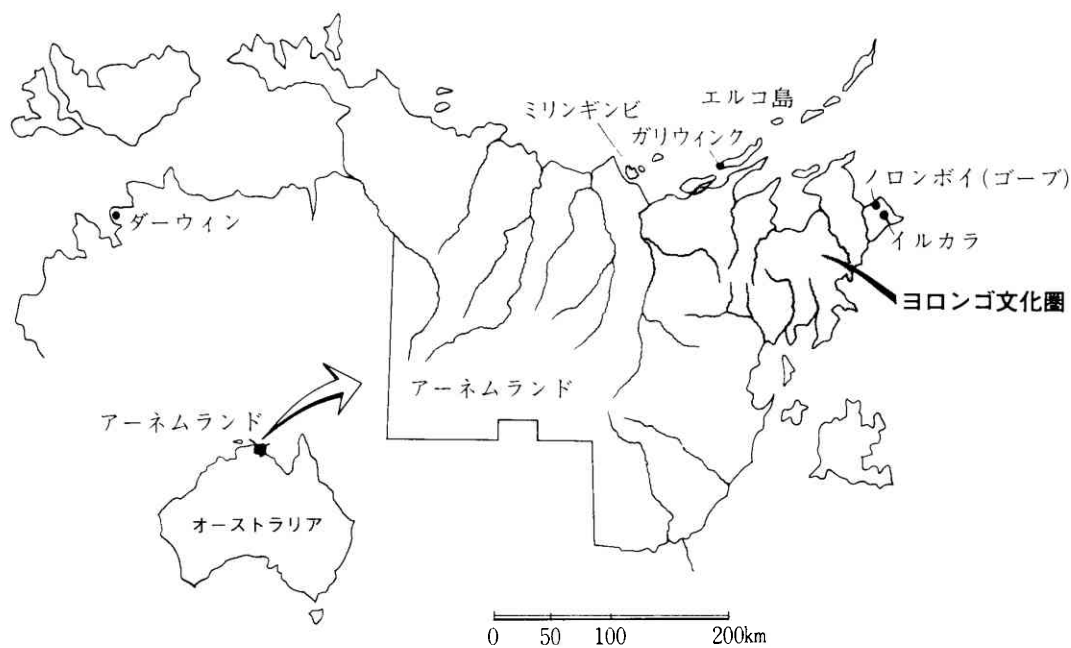
2. 調査地の背景・ヨロンゴの世界

オーストラリアには1788年に英国人が入植を始めた。その当時アボリジニの人口は25万人、約500の部族が存在していたと推定されている。白人の開拓が奥地へと進むにつれ、アボリジニと白人との暴力的な衝突が増加した。武器をもつ白人は圧倒的に優位であり、各地でアボリジニは殺りくされ、居住地を奪われていった。このような殺りく、新しく持ち込まれた病気、栄養不良などによりアボリジニは壊滅的な打撃を受けた。1866

年には、アボリジニ人口は約8万人まで減少している。しかし、そのまま減少をつづけ、絶滅して行くかと思われたアボリジニ人口は、その後増加に向かう[小山 1988]。政府のアボリジニ政策も、隔離主義から同化主義へと変化し、1967年にはオーストラリア国民として認められ、彼らの自立をうながす方向へと向かってきている。そして、現在では自立自営政策がとられ、アボリジニ人口は23万人にまで回復した[窪田 1993]。このような歴史的経緯によって、アボリジニの現状は地域により多様である。たとえば、入植の初期に白人と接触した南部地方のアボリジニ社会は壊滅的な打撃をうけたが、北部地域では、厳しい自然環境のため、入植は遅れ、暴力的な衝突をほとんど経験しなかった部族もある。

オーストラリア最北端に位置するアーネムランドは1931年に保護区に指定され、その後アボリジニの土地となった。アボリジニ以外は許可なく立ち入ることができない。正確な人口はつかめないが少なくとも1万人程度がこの広大な地域に暮らしているといわれる。ユーカリ種が卓越した疎林、岩場、沼地が混在する平原が続く。気候は熱帯気候で年間を通じて日中気温は30度を下まわることはない。季節は雨季と乾季にわかれる。雨季にはしばしば道路が寸断され、車での移動は困難になる。

筆者が調査しているヨロンゴは、このアーネムランドの東端、約200キロ四方の北と東を海に囲まれた地域に暮らす人口約4000人ほどの人々である。1930年代まで白人との恒常的な接触がなかったこの地域では、先住民言語や、様々な儀礼、狩猟採集に関わる知



地図 アーネムランドとヨロンゴ文化圏

識などが良好に維持されている。ヨロンゴとは言語、儀礼、婚姻規則などを共有する同一の文化圏に属する人々で、さらに50をこえる氏族（クラン clan）にわかれている。この地域では1930年代からキリスト教伝道団が同化主義政策のもと、3つの町を建設し、アボリジニの保護、教育にあたってきた。ヨロンゴのほとんどは、現在ではこのいずれかの町か、町の周りある小規模な村に居住している。

筆者が主な調査地としているのは、東経135度、南緯12度に位置するエルコ島のガリウインク（Galiwin'ku, Elcho Island）の町を中心とした地域である。この町は1941年に建設された。町の人口は約1000人。管区全体の人口は2000人を越える。軽飛行機で近隣の都市ダーウィン（Darwin）まで2時間半、ゴーブ（Gove）まで1時間弱である。筆者はここで1985年以来調査を行ってきた。本文のデータはおもに1990年度の調査時のものによっている。

町には病院、学校、町役場、発電所、上下水道、スーパーマーケットなどの設備が整い、人々は政府が建設した近代的な住居に住んでいる。島内の交通には4輪駆動のランドクルーザーがつかわれ、他地域への交通にはボートや軽飛行機がつかわれる。人々は生活に必要な物資をスーパーで購入する。近代的な設備や物資が町にあふれ、貨幣経済に巻き込まれている一方で、彼らは狩猟採集による食物供給に熱心で、儀礼などの伝統的習慣をまもることに心を砕いている。

それぞれの町の回りにはアウトステーションと呼ばれる小規模な村が点在する。これは1970年以降になり、伝統的な生活に回帰しようと村を建築し、少人数で居住するようになったものである。村の規模や組成は伝統的な居住集団と類似しているし、町よりも狩猟採集に依存する割合の高い生活をおくっている。しかし、彼らは白人との接触以前のように遊動的に、季節によってキャンプ地をかえるような生活をおくるのではなく、井戸を掘り、家をたて、ほぼ恒常的にその村でくらしている。村は近くの町から医療、食料、物資、教育などの援助をうけている。こうしたアウトステーションの生活には4輪駆動が必需品となっている。

このように近代的な生活に移行してきているように見えるヨロンゴだが、その一方、さまざまな面で自分達独自の文化に重きをおきつづけている。たとえば彼らは複雑な婚姻規則を持つ部族として、レヴィ・ストロースがその代表的な著書のなかでムルンギンとしてとりあげたこともあり [レヴィ・ストロース 1977]、有名になったが、その複雑な規則は現在も約7割は守られているという報告がある [杉藤 1991]。キリスト教導入後、一夫多妻制は否定的に受け取られるようになり、複数の妻を持つものは減少したし、かつて一般的であった年齢差がたいへん大きな婚姻関係も減少した。しかし、基本的に親族関係にのっとして、結婚に望ましい相手はある程度きまっており、それ以外の結婚は少数派といってよい。正しい親族関係に基づかない結婚は親族から反対され、町の人々

からも眉をひそめて見られるようなものであり、町にいずらくなって、周辺の村や、都市に流出してしまう結果となる。そしてそのような婚姻の場合でさえも「最低限のルール」である半族外婚は必ず守られる。

また、ヨロンゴの最も基本的な生活単位は氏族（クラン）である。ヨロンゴのクランの総数は50をこえるが、各クランはデュワとイリチヤのふたつの半族のいずれかに属する。ガリウインク管区にはこのうち14のクランがいる。クランは外婚単位であり、居住単位の基本でもあり、儀礼単位でもある。それぞれのクランは聖地を中心とした領域を所有し、その場所にまつわる独自の神話を所有する。神話では、人間がこの世にあらわれる以前に地上を旅して、景観を作りだし、言葉を生み出し、動植物に名前をつけていった精霊の行動がかたられる。この精霊が各々のクランの祖先にあたる人間たちに聖地、領域、言語、そしてさまざまなトーテムを与えたのだといわれる。儀礼のなかではこの聖地をつくったクランの精霊をたたえ、その行動を再現し、精霊が出会った全ての動植物を歌い、踊る。つまり、クランは親族関係、婚姻、土地、言語、神話、儀礼の基本となるまとまりであり、ヨロンゴ各個人にとり、アイデンティティのよりどころとなっている。

クラン内部、またクラン同士のつながりは現在も強く、クランを中心とした儀礼が活発に行なわれる。ヨロンゴの儀礼には、葬礼儀礼、成人儀礼、交換儀礼などがあり、それぞれのクランにより、歌い踊る内容や儀礼場の整え方、地面に作る砂の文様などに違いがある。こうした儀礼は近年になってかえって活発に行なわれるようになり、その重要性も増している。

3. 美術工芸品製作・賃金・社会福祉

ヨロンゴの現金収入は、現在のところ主に3つに分類できる。彼らが生産した美術工芸品の販売による収入、被雇用者としての賃金、そして福祉や補助金などの政府から支給される収入である。このなかで美術工芸品製作は、ヨロンゴ自身の生産によって収入をえる手段として現在のところ唯一のものである。

ヨロンゴの美術品、工芸品の製作品目は男女による違いがある。男性は、樹皮画、大型彫刻、儀礼用ポール、槍、槍投げ器、デジャリドゥー（木管楽器）をつくり、女性は、編み袋、バスケット、小型彫刻、パイプ、首飾りなどをつくる。樹皮画はユーカリの樹皮をキャンバスにして土粘土の絵の具でヨロンゴの神話に基づく絵を描いたもので、アボリジニの美術品の代表的なものとして、近年は内外から評価が高まり、高い価格で取り引きされるようになってきている。デジャリドゥーはユーカリの木の内部を白ありが食べ、中空にしたものを整えて管楽器とする。この表面やそれ以外の彫刻にも神話に基

づいて、樹皮画と共通する絵がえがかれる。女性の工芸品は草木ぞめで染めた天然繊維を用いて編み上げた各種のバスケットが中心で、それ以外に柔らかい木をつかった小さな彫刻もつくる。

製品の販売は、おもに美術工芸品センターを通じておこなわれる。センターの記録を見ると、ほぼ町の成人全員が何らかの工芸品を製作販売している。しかしほとんどの者は少額販売者であり、個人あたりの総販売高は低く、1年に400ドル以上の販売をしているものは、男性30人、女性20人にすぎない。つまり美術工芸品の製作で高額収入をえる

表1：美術工芸品高生産者の収入にみる男女差

	男 性	女 性
最高生産額	8,608ドル	5,023ドル
2000ドル以上	10人(33%)	2人(10%)
1000~2000	9人(30%)	8人(40%)
400~1000	11人(37%)	10人(50%)
平均収入	1,842ドル	1,258ドル
平均生産数	91.2個	116.5個

ものは少数なのである。400ドル以上の収入を得ている男女を比べると(表1)、男性は高いものを少量、女性は安いものを多量につくる傾向があり、平均年収で男性で1842ドル、女性で1258ドルと、男性の方が製作品目数が少ないにもかかわらず、収入が多くなっている。

高収入の女性達はほぼ毎月のように販売記録にあらわれ、彼女らの継続的な製作がうかがわれる点などについては、すでに報告した通りである [Kubota 1991, 窪田 1992]。

また、男性の樹皮画や彫刻にはさまざまな制限があることも製作数や製作者数が少ない理由と考えられる。樹皮画や彫刻は全員が製作できるものではない。これは、樹皮画に描かれる内容は、各クランの神話に基づくもので、だれでもが描いて良いものではないという事情も影響している。また、こうした作品では才能や技術の差がかなりはっきりと作品の出来に影響する。それに対して、女性のつくるものにはクランによる制限がなだけでなく、基本的に誰でもが作ることができ、技術の差があらわれにくい。この結果、女性の多くがこつこつと継続的な仕事をし、結果としてある程度の収入をえるものがあらわれ、それに対して男性の作業は継続的でないという傾向がみられるのである。

次に雇用による賃金収入の面を考えてみよう。町にある学校、病院、スーパーマーケット、銀行、郵便局などの諸機関は、政府に雇われた白人の補助をえてアボリジニが運営しており、それぞれの機関で数名ずつが雇用されている。1990年現在の雇用者数は表2の通りである。どの機関でも基本的には時給制度で雇用されており、時給は7ドルから10ドル程(1990年現在、1豪ドル110円)である。雇用されている人の男女比率をみると女性の数が多いことがわかる。表の中の星印は、1985年以来安定して職についており、常勤に近い状態になっている者を示しているが、このように安定した被雇用者は圧倒的に女性に多いことがわかる。

表2：雇用状況（1990年現在）

雇用機関	男性(人)	女性(人)
病院（ヘルス・ワーカー） （掃除）	1*	5*
町役場（役員） （事務員） （掃除）	4	2 2* 2
郵便局		2
銀行		2
軽飛行機会社	2	1
警察	1*	
リソースセンター（職員） （掃除）	4*	2* 2
マーケット（棚卸し） （キャッシャー） （事務） （掃除）	2	2 4* 2* 3
学校（教員） （掃除）	1*	7* 3*
ゴミ回収	2	
農園	4	
成人教育センター		2
ALP		2
水道工事	3	
発電・電気工事	4	
建築・土木	4	
合計	32	47

町では現在、それぞれの機関でアボリジニ化をめざした動き（Aboriginalization）がおこっている。これまでのところ、各機関の長はアボリジニが任命されているものの、それはむしろ建て前であり、実際の運営はアドバイザーと呼ばれる白人が受け持っている。これを実際の機関の運営もアボリジニ中心にしてゆき、責任をもつ立場のスタッフを全員アボリジニにしてゆこうという計画である。特に学校は、これまでは校長、副校長を含めすべて白人が中心になって運営されてきた。アボリジニは補動教員か清掃員、営繕などとして働いているだけであった。カリキュラムも教育省が決めた白人の学校と同様の物が使われていた。しかし、近年になって、アボリジニのためのカリキュラムがくまれ、2言語教育を行ない、将来的には

現地語で各教科を教えるようにしようと計画している。そのためには、教員の側のアボリジニ化が必要であり、まず1989年には、教育委員会の決定にしたがい、アボリジニ女性が校長になった。彼女はその2年前からこの計画のためにしばしばダーウィンに研修にかよっていた。現在ガリウインクに住むアボリジニで正教員の資格を持っているのは彼女をふくめて3名の女性しかいないが、今後にもけて5人のアボリジニ女性がダーウィンの学校で勉強をつづけている。また、病院でも、現在は白人の看護婦が二人常駐しているが、ヘルス・ワーカー（準看護婦に類似）の資格を持つアボリジニが6人（内女性5人）おり、彼らは通信教育をうけ、年に数回ある研修会などにでかけ、勉強を続けている。来年にはアボリジニの一人が看護婦の資格を得る予定で、白人の看護婦を一人の体制にするという。

町の機関で賃金収入をえているものは、男性32人、女性47人と数の上でも女性が多い。そして、さらに安定してその職についているものは女性27人、男性6人で、圧倒的に女

性が多い。とくに学校の教員、看護婦、簿記などの専門的な知識を必要とする職についているのはすべて女性たちであり、アボリジニ化が実現するか否かは女性達の働きにかかっている。

さて、賃金収入や美術工芸品による収入を得る者もあるものの、経済的な全体の状況を見ると、大多数の人々の生活の経済的基礎は社会福祉金や政府の各種補助金によってえられている。手当は、2週間毎に支給されており、児童手当が子供一人につき、60ド

表3：社会福祉年金および補助金の種類

種 類	受 給 者
* 児童手当	16才以下の子どもを持つ親に一律支給
* 寡婦手当	夫が死亡した妻に支給
老齢手当	60才以上の男女に支給
失業手当	16才以上の失業者に支給
* 片親手当	16才以下の子供をもつ片親に支給
疾病・障害者手当	政府の認定した障害者、疾病者に支給

(*印は、女性だけがもしくは、女性が有利に受け取る補助金を示す。)

ル弱であるのを別にすると、個人によって多少の差はあるが、おおよそ2週間で300ドル(1990年現在)ほどの手当である。表3に手当の種類を示した。これにみられるように、老齢年金や失業手当、疾病・傷害者手当は男女同様にその権利をえるが、それ以外に女性のほ

うが受け取ることの多い補助金がある。児童手当と片親手当はとくに女性にだけ与えられる補助金ではないが、子供の世話をしているのはこの社会の場合女性が多く、結果としてこうしたお金は母親の収入となる。また、寡婦年金は夫婦間の年齢差が大きく、男性がずっと年上であるというヨロンゴ社会での婚姻慣例の結果、女性が寡婦年金を受け取る機会が増加している。

このような福祉金のなかった時代には寡婦となった女性の立場は不安定で、子供(娘)の世帯に身を寄せることが多かったという[Peterson 1974]。また、寡婦となった女性は生活のため、意に沿わなくても再婚を余儀なくされていたが、寡婦年金などの結果、寡婦達の共同の家がもてるようになったという他地域の報告もある[Bell 1980]。福祉手当という現金収入は、男性よりも女性に有利に働いており、それが彼女らの生活の基盤を与えている。

狩猟採集だけで生活していたころの女性の採集作業は男性の狩猟と比べて、ほぼ毎日繰り返しておこなう継続的な労働だった。労働時間も長く、食糧によっては、加工、調理にさらに繰り返しの多い長時間の労働が必要になる。美術工芸にみられた女性の労働パターンには、こうした伝統的な労働パターンとの共通性がみられる。そして、こつこつと毎日働くという女性の労働パターンは、雇用機会でも同様に有効に働いていることがわかる。それは白人の労働観に近いものとして、女性たちが雇用機会にうまく適合することにつながった。そしてその結果として、多くのポストが女性によって占められ、

さらには、責任ある地位に女性がつくようになってきてきた。こうした状況に加え、社会福祉など各種の援助金が女性たちに全体として経済的な基盤と安定を与えることとなった。その結果、社会のなかで女性は力を持つようになり、ヨロンゴ社会の様々な変化の要因の1つとなっていると考えられる。

4. 経済的安定と変化

そうした変化のひとつは美術工芸品製作の分野でおきている。これまで樹皮画の製作は男性のみが行うものであった。女性は夫の作品に手をかすことはあったが、それはあくまでも男の作品であった。それは、さきに述べたように樹皮画が描かれる内容が、個人のものではなく、クランの神話であり、神聖性が高いものだからといわれてきた。男性でも誰でもが描いてよいわけではなく、クランによって描く権利を持つ人だけが製作するものとされる。実際のところ、これまでに樹皮画の販売をめぐるクラン内部やヨロンゴ社会全体の中で、販売した作品が、その部族の秘密に関わるもので外部に出すべきものではなかった、という反発が表面化し、クラン内で混乱が生じるなど多くの問題が発生してきた。男性の樹皮画家たちは、いまでは樹皮画の販売を行う前に、あらかじめ他のクランの成員たちとの話し合いを行うようになっている [Cawte 1993]。

ところが、近年、少数の女性が樹皮画を描くようになった。樹皮画はかれらの神話を描くもので、その神話についての権利を持たない女性は描けないはずである。しかし、女性たちは神話に基づくものの、最も秘密とされる場所には抵触しないような題材を選んで描き、それは神話とは直接関係のない「単なる絵」なのだと説明する。大きさも男性の樹皮画が時には1辺2メートル近い大きさのものを使うこともあるように、大きなものを志向する傾向があるのに対し、女性は小さなものをつくる傾向がある。彼女たちの製作は、継続的であるから、その生産性はたかくなる。樹皮画は袋やバスケットとくらべて単価がたかいので、彼女らの収入は飛躍的に伸びることになる。

また、女性の樹皮画の方がよく売れる結果となっていることも特筆される。男性は自分の部族の重要な神話を樹皮画に描き、それは文化的に重要なものであるとして非常に高い値段がつけられる。それは、しばしば50万円を超えるようなものになり、販売効率が落ちてしまう。それに比べて、さきに述べたように女性の樹皮画は神話的な秘密性、または神聖さがなく、大きさも小さい為に、男性のものよりも、ずっと安い値段がつけられる。見た目には同じ樹皮画であることもあって、女性の絵画の方がよく売れることになるのである。

さらに、ガリウィングで起こっている変化に影響を与えられる興味深い現象がヨロンゴの他地域でおこっていることを述べておきたい。ヨロンゴ圏の東端にイルカ

ラという人口約600人の町がある。イルカラの町にはかれらから美術工芸品を買い上げ、都市の画廊や美術館へ売る仕事をするアート・センターがある。ここには常時樹皮画や彫刻が収蔵されている。またこれまでの有名な樹皮画家の作品を集めた小規模な美術館も併設されており、一般に公開されている。イルカラでも1930年代には樹皮画を描くのは男性で、神話を表す樹皮画は神聖なもので、女性や子供にはみせてはいけないとされていたという、当時アーネムランドで調査を行なったトムソンによる記録がある。もう少し公開性の高いものでも女性は手伝うだけだったという [Peterson 1976]。

ところが、現在ではアート・センターに販売のために集められている絵や彫刻の半数以上が女性のものである。それも神話と関係のない「単なる」絵ではなく、クランの神話にもとづく絵画が大部分である。イルカラの女性達は複数のクランの男性樹皮画家たちが、1960年代に娘に教えはじめたのをきっかけとして、1970年代から樹皮画を描くようになったといわれている [Morphy 1991]。理由を尋ねると、女達は、男の子たちが興味を示さなかったために父が娘達に教えるようになった、若い男達が飲酒に走ったりして、儀礼などに興味をもたず、芸術にも熱心ではないので徐々に女性がとって替わるようになった、と説明した。ここでも女性が絶対に描いてはいけないといわれる図柄はあり、それを描くことはしない。しかし、彼女らの絵は、それぞれのクラン神話にもとづいたものであり、その神話を語ることもできる。これはガリウィングではみられないことである。

これに加え、さらに大きな変化は儀礼のなかでの絵画を女性が描くようになったことである。イルカラでは商品用の樹皮画製作だけでなく、葬式の際につかわれる布の装飾も女性が行うことがふえている。かつては男性が遺体とお棺に文様を描いていた。ところが、現在は布に描いてそれをお棺にかぶせるようになり、それが女性によって行われることが多くなっている。また儀礼の時の身体装飾も女性がおこなうことが増えてきた。反対に女性たちは編み物などの工芸をあまりしなくなってきた。女たちは作り方は知っているが、時間がかかりすぎるといい、いまでは工芸品製作をおこなうのはほんの少しの年寄りだけになっている。イルカラでのこうした劇的ともいえる変化についての考察は、紙面の関係上、別稿にゆずることにしたい。

イルカラでの変化は近い将来、同じ文化圏にあるガリウィングの女性達にも影響を与えることになるであろう。アボリジニ社会での伝統的な男女の異なる労働感が、白人社会の価値観とであい、よりうまく適合したのは女性の労働感であった。そうして、ある程度の生活の基盤をえた女性は、今や社会の中で男性以上に責任のある立場を得、より経済効率のよい活動に乗り出しつつあるのである。そしてその範囲は男性だけの知識とされていた神話の分野にも及びつつある。

5. おわりに

狩猟採集経済から貨幣経済と生業経済の混合という形へと変化してきたヨロンゴの生活には、経済活動の変化だけでなく、社会のその他の分野でもさまざまな変化がみられ、これまでになかった女性への神話継承が行われるようになってゆく可能性さえうかがわせる。

イルカラでの変化が示唆していること、そして、ガリウィングでの始まりかけた変化が示唆していることは、社会変容によってアボリジニ社会の伝統的枠組が崩れ、女性に樹皮画を描くことが許されるようになり、伝統が失われてしまう、というように読むべきだろうか。筆者はむしろ、神話継承を含めてアボリジニ社会は常に融通無碍であるということが、示唆されているように思う。たとえば、ヨロンゴの親族規則であるが、これはたいへん複雑な規則でそれを遵守した婚姻を結び続けることは困難に思えるほどである。規則にしたがった婚姻が「伝統的」で、規則にはずれた婚姻が増加していることは、彼らの「伝統」が崩壊に向かっていることのあらわれである、と考えることは妥当だろうか。実は、この規則自体その起源は50年以上はさかのぼらない、という指摘さえあるのである [Warner 1969]。

女性にはいっさい継承させない、見せない、女性は知らない・・・という建て前のうらで、その場と状況に応じた対応をヨロンゴはおこなっている。それは、現在のような激動期以外でも、白人との接触以前にも、建て前を維持しながら様々な場面で行われてきたことに違いない。確固とした伝統社会があり、それが新しい要素によって変容してゆくという見方がむしろ一面的であることをこの二つの町の違いは語っている。人類学者によって規則が発見されることによって、「伝統」が創出される可能性さえあるのである。その意味で、「変化・変容」についての捉え方の再考が必要なのではないだろうか。

付 記

本稿は、第46回日本人類学会・日本民族学会連合大会（1992年10月25日於・大阪大学）で口頭発表した論考と、第47回の同大会（1993年10月31日於・立教大学）で口頭発表した論考に、加筆訂正したものである。口頭発表に対し有益なご助言を多数賜った。また、本論考のもととなった研究は、1990年度文部省科学研究費補助金国際学術研究（共同研究 課題番号02044162 代表者：国立民族学博物館助教授松山利夫）の成果の一部である。記して謝したい。

引用文献

- Bell, D. 1980 Desert politics: Choices in the "Marriage Market". In M. Etienne and E. Leacock (eds.), *Women and Colonization: Anthropological Perspective*, New York: Praeger, pp. 239-269.
- Cawte, J. 1993 *The Universe of the Warramirri*, Kensington: New South Wales University Press.
- 小山修三 1988 「オーストラリア・アボリジニ社会再編成の人口論的考察」『国立民族学博物館研究報告』13巻1号、37-68頁。
- Kubota, S. 1991 Women's Craft Production in Arnhem Land, North Australia, In N. Peterson and T. Matsuyama (eds.) *Cash, Commoditisation and Changing Foragers, Senri Ethnological Studies 30*, Osaka: National Museum of Ethnology, pp. 31-46.
- 1992 Household Composition in a Modern Australian Aboriginal Township, *Man and Culture in Oceania*, 8: 113-130.
- 窪田幸子 1992 「アボリジニの工芸品生産にみる変容—女性工芸者集団の社会関係の視点から」『オーストラリア研究紀要』18号、125-150頁。
- 1993 「多文化主義とアボリジニ」石川栄吉監修、清水昭俊・吉岡正徳編『オセアニア3 近代に生きる』東京大学出版会、99-113頁。
- Morphy, H. 1991 *Ancestral Connections: Art and an Aboriginal System of Knowledge*, Chicago: University of Chicago Press.
- Peterson, N. 1974 The Importance of Women in Determining the Composition of Residential Groups in Australian Aborigines, In F. Gale (ed.), *Woman's Role in Aboriginal Australia*. Canberra: Australian Institute of Aboriginal Studies, pp. 16-27.
- 1976 Mortuary customs of North-East Arnhem land: An account compiled from Donald Tomson's fieldnotes, *Memoirs of the National Museum of Victoria*, 37: 97-108.
- レヴィ・ストロース、C. 1977 馬淵東一・田島節夫監訳『親族の基本構造』上巻 番町書房
- 杉籐重信 1991 「人口制御要因としての婚姻規制—コンピュータ・シミュレーションによる分析—」小山修三編『オーストラリア・アボリジニ—狩猟採集民の現在— 国立民族学博物館研究報告別冊』15号、251-275頁。
- Warner, R 1969 *A Black Civilization: A Study of an Australian Tribe*, Gloucester: Peter Smith.